

た。3歳から6歳までの子供が同時に針を持つのだから、おちおち自分のことばかりに集中できない。糸の針通し、たま結び、運針縫いから半返し縫いと手順を教えても、大人のように初めからすいすいと針仕事のできる子供などいない。単純に針を下から上へ通す作業さえ、上手くできない。何度、針から糸を抜き、また糸を通し直すという手伝いをしながら、仕舞いのたま結びをする楽しみを教えたことか。

私自身が物を作る楽しみを知っているため、一つの作品を仕上げるのに、時間など気にした事がなかった。反って、時間をかけて、より丁寧なものを作る事が大事だったため、子供たちがいくら時間をかけても気にならなかった。「針遊び」だけでなく、何をするにも時間のかかる子供は、出来るまで待ってやり、手伝ってやりながら、遊ばせてきた。

家庭での「遊び」を通じて、子供ができる作業を何となく鍛錬していたつもりがあった。それが、キンダーガーデンに入った途端、与えられた課題を時間内に終わらせるという事は、大切な事なのだという新たな生活習慣を問われたのだ。私自身も、子供の習慣づけには時間のかかる事、また、反対に掛けてはいけない事などがあるのを知っていた。仕上りの上手・下手よりも、時間を有効に使うという生活習慣を、キンダーガーデンから求められる子供の大変さに、私は少なからず抵抗感を持った。持って生まれた性格もあるだろうが、それもあえて適応できる子供に育てていかなければならない事に、自信が持てなくなっていたからだった。

キンダーガーデンとは、日本でいえば幼稚園の年長さんであろう。そういえば、次女は5歳のとき、日本の幼稚園を入園式から1学期だけ体験入学した経験がある。次女の体験入学で印象深かった事がある。日本の年長さん達は、



ベルが鳴る前にスモックに着替え、先生の姿が見える前に床に座って行儀よく整列していた。入園が同じなのだから、次女も当然同じ事を教わっているはずだから出来るはずなのに、人のする事をじっと見るばかりで、どうしてもワンテンポ遅れ気味だった。

また、七夕に親子で笹作りをした際のことだ。どの親子さんも、自分達の笹を飾るのに、流れ作業のごとく、丁寧できれいな短冊やリングをどんどん仕上げているのを、びっくりしながら見ていた。片や、私たち親子は、短冊に使う色紙選びに時間がかかったり、リングの色合わせに話し込んだりしたため、数たくさんのもものが仕上げられず、ずいぶん寂しい笹となってしまったのだ。次女には、家に帰ってから、また、一緒に作って飾ろうと約束した事を覚えている。

特別意識して見た訳ではないが、この体験入学で、要領よく作業する日本の子供の姿を目にした事で、やり方を工夫すれば、子供に "Use time wisely" を身に付けさせるのも、そんなに難しいことではないように思えた。

実は、この "Use time wisely" という言葉は、子供たちが成人した今日でも、私が子供たちに求める最も大事な習慣の「はしら」の一つであり、まだまだ習慣づけに努力のいる目標だと、つくづく思う。

松本康子
(まつもとやすこ)

1979年、夫の留学で、1歳半の長女を帯同し渡米。その後、アメリカで次女、三女を出産。専業主婦として子育てと教育を担当。子ども達は、親から見てうらやましいバイリンガル・バイカルチャーの大人となった。このコラムでは、「アメリカで日本人の子どもをバイリンガルに育てた」私と子どもの悪戦苦闘の姿を紹介。